1 飛鳥時代から登場

「えな」という名

恵那市の「えな」は、その昔「恵奈」と書かれていた。恵奈の名が初めて歴史に登場するのは、古く飛鳥時代の677（天武6）年。1998（平成10）年明日香村出土の木簡に、「三野国（美濃国）恵奈里の造（里長）の阿利麻という人が次米（スキの米＝天皇が神に供える米）を献上した」と書かれていた。このことから、恵那の地は、当時の国内でも有数の米どころであったことが分かる。

また、「エナ」の語源は、恵那山の山名が一般化したものという説がある。恵那山には、天照大神の胞衣（へその緒）を納めたところという伝説があり、この胞衣という言葉が語源になったといわれている。

「恵那」の語源となった恵那山

ひとくちメモ

現在使われている「恵那」の表記が定着したのは、明治時代になってから。また、「エナ」の語源は、恵那山の山名のほか、「エ（彫）＋ナ（土地の意味）」で、「えぐられた所」つまり侵食地形を示すという説もある。

関連項目 ・恵那栗（P31）

2 超古代からのメッセージ

ペトログラフ・イワクラ

ペトログラフとは先史時代から岩石に刻まれた文字や記号、文様、絵画のことを言い、特に笠置山周辺でみられる。学術的研究と古代のロマンを求め、地元住民をはじめ、各種団体が古代からのメッセージを研究中。

イワクラとは、現代の神社やお寺などの本殿に相当する超古代の山岳祭祀遺跡のことをいう。今から約4千年以上も昔、三角岩や巨大石など不思議な形をした大小さまざまな岩をご神体岩として祭ったもので、「磐座」と書き表す。山岡町には野田、別荘、奥小屋、源太洞、雨洗美、石戸神殿の巨石群がある。

中野方町にあるピラミッド状岩

ひとくちメモ

長島町鍋山の中腹に立つメンヒルは原始的な呪術、儀礼、あるいは信仰と深い関係をもった遺構とも考えられる巨石記念物。寄り添うように立つ2本の立石の数センチ離れたすき間からは、夏至に日の出が見えることが確認された。

関連項目 ・笠置山（P51）

3 8世紀の大伽藍跡

正家廃寺跡

長島町にある奈良時代の寺跡で国の史跡。正家地内の国道257号線から西に入った丘陵上に位置し、高塚状に塔と金堂の基壇が残っている。遺構調査の結果、東西110㍍、南北70㍍の寺域を有し、主要伽藍を法隆寺式に配置する本格的な古代寺院跡と判明。国宝玉虫厨子と同じ柱の配置をとる特異な構造の金堂、希少性の高い風鐸や奈良三彩などの遺物、日本最古の床板を有する竪穴住居など多くの特色ある成果があった。瓦はまったく出土せず、屋根は板葺あるいは桧皮葺であったと考えられる。8世紀前半に造営に着手され、その後9世紀後半に主要伽藍の火災を契機として廃絶したものとされる。

正家廃寺跡に残る塔の心礎

ひとくちメモ

古代の恵那地域には長島町正家の正家廃寺と山岡町上手向の手向廃寺があったとされる。正家廃寺は、1977（昭和52）年から南山大学が4年間、1992（平成4）年からは市教育委員会が発掘調査を行った。

関連項目

4 市内入寂が伝わる歌聖

西行伝説

西行は、平安時代の高名な歌人で、「歌聖」と呼ばれる。俗名を佐藤義清といい、1118（元永元）年生まれ。新古今集に94首が採録される。妻子を持つ裕福な武士でありながら1140（保延6）年に突然出家し、全国を行脚しながら数々の優れた歌を残した。恵那の地にも多くの伝説が残る。市内には歌を詠む際、この泉で墨を擦ったという「西行硯水」（県の名水100選）をはじめ、梅露庵や松林庵、竹林庵などゆかりの史跡が点在し、大井町の長国寺と長島町の長栄寺には西行の位牌が残されている。長国寺縁起によれば、「西行の死後は遺言通り村人が旧中山道中野坂の傍らに埋葬し、五輪塔を建てた」とあり、これが古くから西行塚といわれ、県の史跡に指定されている。

長島町中野の西行塚

ひとくちメモ

東野向島の「杉山の清水」（県の名水100選）は、西行が一口飲んで「実に甘くておいしい」と称賛したとか。以来そのご利益により、枯れることも濁ることもなく、夏は冷たく冬は暖かい水がわき続けている。（ただし飲料水ではないのでご注意を。）

関連項目

・中山道（P8）

5 日本三大山城

岩村城跡

近世の山城のうち、全国で最も高い標高717㍍に築城されたことで「日本三大山城」の一つに数えられる。(財)日本城郭協会の「日本100名城」にも選定。高低差180㍍の険しい地形を巧みに利用した要害堅固な山城で、霧が多いこの地方特有の気象までもが城造りに生かされたとされ、別名「霧ヶ城」とも呼ばれる。その創建については、源頼朝の重臣加藤景廉が1185（文治元）年に築いたと伝えられる。美濃と信濃を結ぶ交通の要衝にあり、戦国時代には織田と武田の争奪戦の舞台となった。城を守った数々の城主の中には、政略結婚の道を選びながらも、家臣や領民を守った心優しい「女城主」の存在もあったとされる。現在、市では岩村城跡の保存と整備に向けた構想を検討しており、今後、城下町と城跡を生かしたまちづくりが進められる。

岩村城跡

ひとくちメモ

日本三大山城には、岩村城のほかに、大和の高取城（奈良県）、備中の松山城（岡山県）がある。岩村町では城を再建しようと、住民らにより再建構想実行委員会が組織されている。同委員会では、城内にあった三重櫓を描いた「幻の霧ヶ城」のパネルを設置するなど、再建をアピールする再現事業を行っている。

関連項目
・明知城跡(P6)・武並神社本殿(P7)・石室千体仏(P8)
・渡辺美佐子(P15)・いわむら城址薪能(P21)・岩村歴史資料館(P24)
・岩村本通り(P48)・富田地区の農村景観(P48)

6 光秀生誕の城と伝わる

明知城跡

市の南部では岩村城に次ぐ規模の城郭で、別名「白鷹城」とも呼ばれる。明智町の東側にそびえる標高530㍍の通称城山の頂上に位置し、当時は恵那郡における織田信長軍の拠点であったとされる。1247（宝治元）年、源頼朝の重臣加藤景廉の孫である明知遠山氏の始祖、景重の築城による遠山氏累代の居城であったが、1574（天正2）年、武田勝頼の軍勢に攻められ落城。天然の険しい地形を巧みに利用した山城で、石垣のない土づくりの城砦として規模も大きく保存状態もよい。県の史跡に指定されている。

明知城跡

ひとくちメモ

伝承によれば明智家11代光秀は、1526（大永6）年に当時明知城があったといわれる現千畳敷公園で生まれ、この場所の井戸が「光秀産湯の井戸」といわれている。

関連項目
・岩村城跡（P6）・八王子神社（P7）
・岩村歴史資料館（P24）・団子スギ（P34）

7 いにしえの建築美を残す

武並神社本殿

大井町の国道19号北側に位置する武並神社本殿は、室町時代の建築美を残す国の重要文化財。1220（承久2）年に創建されたと伝えられる。現在の本殿は、1564（永禄7）年に岩村城主、遠山景任が本願となって再建されたものである。

うっそうと繁る木立に囲まれた桧皮葺、入母屋造りの本殿はバランスもよく、素晴らしい建築美を誇っている。また、垂木の様式も古く、装飾に使っている蟇股は古美術的な価値が高い。2007（平成19）年に開始した大規模改修は、腐朽した本殿を446年ぶりに全面解体後修理・復元することにし、2年8ヵ月かけて、2010（平成22）年6月に無事終了した。解体修理により、戦国時代の大工が残した墨書が発見され、本殿工事は愛知県の熱田の大工が担当したことが判明した。今回の工事で、本殿は永録時代の姿に復元。屋根には金箔を張った鬼瓦が施されている。

当時の形に修復し、悠久のときを超えた本殿

ひとくちメモ

建物をいったん解体しての大規模改修は、440年余の歴史で初めてのことで、事業費は、1億8,900万円。解体調査で、彫刻やデザインなど戦国時代に再建された本殿の時代的な特徴や、再建当時の資料・部材が多く残されていることが判明した。

関連項目 ・岩村城跡（P6）

8 明知遠山氏ゆかりの神社

八王子神社

明智町にある神社で、牛頭天王の8人の王子が祭られたということがその名の由来。社伝によれば949（天暦3）年から、明知・串原・高波・浅谷などの諸村を領していたが、1574（天正2）年、武田勝頼の軍勢により明知城とともに焼失。現在の社殿は、1676（延宝4）年、旗本明知遠山氏によって造営されたもので、本殿・弊殿・拝殿を連結したいわゆる権現造。これら社殿や絵馬は県の重要文化財に指定されている。また、毎年10月の大祭には、市の無形民俗文化財に指定されている明智太鼓が奉納される。

八王子神社

ひとくちメモ

神社境内には「光秀公手植えの楓」や、光秀公建立と伝えられている桔梗紋を彫りつけた「柿本人麻呂神社」、また、神社隣の龍護寺には「光秀公の供養塔」など、明智光秀ゆかりの地として多くの伝説を残している。

関連項目 ・明知城跡（P6）

9 7年に一度のご開帳

石室千体仏（いしむろせんたいぶつ）

岩村町にある経塚。1632（寛永9）年、岩村藩主松平乗寿（のりなが）が岩村城の鎮護（ちんご）と領民の繁栄を祈願して建立。浄土三部経・千部を地中深くに埋蔵し、その上に石室を設け、千体の阿弥陀（あみだ）像を安置したという。約110年を経て岩村藩主松平乗賢（のりかた）らにより、1741（寛保元）年に修復再営。石室を改修し、仏像も新しく作って埋蔵した。全仏像とも金彩（金箔）が施してある。祭事は7年ごとの春にご開帳され、2週間にわたり千体仏を拝観することができる。最近では、2006（平成18）年4月にご開帳された。岩村城下町の周囲には、このほかにも町を守るようにいくつかの経塚が取り巻いている。

石室千体仏

ひとくちメモ

往時は、20数人の僧衆によって荘厳な儀式が1ヵ月間続けられたという。また、この経塚には悲恋の伝説も残されている。城主の妻楓姫に、恋心を抱いてしまった家老の松平左門が大蛇に飲み込まれてしまい、心労から病の床に就く楓姫の回復祈願と左門の弔いに建立したともいわれている。

関連項目
・岩村城跡（P6）

10 江戸時代の街道

中山道（なかせんどう）

江戸時代の五街道の一つで、江戸と京都を結ぶ東西交流の大動脈。総延長は約541㌔㍍で、その間の宿場数が69宿あったことから、中山道69次と呼ばれるようになる。その中山道は、市内を約11.4㌔㍍にわたって横断しており、長島町中野から武並町藤までは、江戸時代そのままと言っていい道が残っている。市内の中山道の特徴は、第一に高低差が124㍍と坂道が多く、甚平坂をはじめ「何々坂」と名づけられている所が19ヵ所もある。第二に一里塚が2ヵ所（槙ヶ根、紅坂）、道の両側にほぼ原型をとどめて残っている。これらは、全国的にも貴重な史跡として注目される。

武並町藤を通る中山道

ひとくちメモ

中山道は別名「姫街道」とも呼ばれ、女性が利用することが多かったとされる。東海道と比べて距離は長いが安全で難所が少ないのが利点とされ、将軍家へ嫁ぐ姫宮の通行が多く、和宮親子内親王（かずのみやちかこないしんのう）が徳川家へ降嫁した時も利用された。

関連項目
・西行伝説（P5）・大井宿（P9）
・七日福市（P18）・中山道広重美術館（P24）

11 県内十七宿で一番のにぎわい

大井宿（おおいしゅく）

大井宿は江戸日本橋から数えて46番目の宿場。かつては美濃路随一の宿場として栄え、全国でも9番目の盛況ぶりだったという。宿場内には、外敵を防ぐ目的で、街道が直角に曲がる枡形（ますがた）が6ヵ所造られているが、これほどたくさんあるのは中山道の宿場ではここだけ。また、大井宿本陣（大名などの宿泊所）は、1947（昭和22）年に全焼したが、表門、庭園は今も残り、往時の面影をしのぶことができる。なお、2000（平成12）年には、江戸時代の豪壮な商家古山家住宅を市が復元整備した「中山道ひし屋資料館」がオープン。重厚な町屋の建物を肌で感じながら、街道や宿場の知識を深めることができる。

大井宿本陣跡

ひとくちメモ

1993（平成5）年には、「中山道かたりべ講座」の修了生を中心に「中山道かたりべの会」が結成された。中山道を訪れた方々に対してガイドをするなど、もてなしの心で活動されている。また近年は、「中山道大井宿のれんアートコンテスト」が開催され、期間中は街並みにのれんが飾られ彩りを添えている。

関連項目
・中山道（P8）・七日福市（P18）
・中山道広重美術館（P24）

12 全国15番目に開通

岩村電気軌道（いわむらでんききどう）

県下初の電気軌道であり、全国で7番目に着工し15番目に開通した電車。1902（明治35）年の中央西線開通により、商業の中心から地位が一転した岩村を守るため、浅見与一右衛門（あさみよいちえもん）は大井・岩村間に鉄道を敷設し、旅客と貨物を運ぶ計画を立案。岩村電気軌道㈱を1903（明治36）年に設立し、小沢（おさわ）峡谷の難工事や、日露戦争、水害などの困難を克服し、1906（明治39）年に全線を開通。電車の電力供給は小沢発電所からで、1907（明治40）年には電力事業として、岩村・本郷・東野・長島・大井・坂本の1,600余りの電灯をともした。その後電灯収入が会社の経営を潤した。鉄道省（国鉄）明知線の開通により、輸送量が激減し1935（昭和10）年に全廃。

岩村町飯羽間を走る電車

ひとくちメモ

電力王と呼ばれた福沢桃介により、矢作川上流に水力発電所を造るために設立された矢作水力と合併し、発電所建設の資材輸送の役目も担った。電車は人が歩くよりも少し速いくらいの速度で運転され、電車が来ると家の電灯が暗くなるというエピソードもあった。

関連項目
・浅見与一右衛門（P12）・福沢桃介（P14）
・明知鉄道（P30）・矢作ダム（P43）

13 美濃初の藩校

知新館（ちしんかん）

岩村町にある藩校。江戸末期の儒学者林述斎（はやしじゅっさい）、佐藤一斎（さとういっさい）など数々の偉人を輩出した。1702（元禄15）年、松平乗紀（のりただ）によって文武所（ぶんぶじょ）が創立されたことに始まる。美濃国では最初の藩校で、全国的にみても藩学としては古く早い時期に設立された。知新館の知新とは、孔子が著した論語の「温故知新」から取ったもの。1984（昭和59）年に、当時あった岩村高校敷地内から現在の藩主邸跡に正門が移築された。この正門は県の史跡。門に向かって左側の釈奠（せきてん）の間には、「孔子画像軸（こうしがぞうじく）」が奉懸（ほうけん）されており、藩校の儒官は教室へ行く前に、釈奠の間で孔子像を拝して心を清らかに鎮めたという。毎年4月には全国でも珍しい釈奠の儀（孔子祭）が執り行われている。

知新館

ひとくちメモ

釈奠とは旧暦2月と8月の上の丁（ひのと）の日に行われる、孔子と孔子十哲の画像を掲げて、これを祭った祭典のこと。応仁の乱のころ廃れたが、林羅山（らざん）が1633（寛永10）年に江戸忍ケ岡の孔子廟で復活させた。岩村藩では文武所創立から明治時代まで実施されていた。

関連項目 ・佐藤一斎（P11） ・林述斎（P11）

14 江戸時代の商業道路

中馬街道（ちゅうまかいどう）

信州飯田と名古屋や三河地方を結ぶ街道であり、山間地の物資と海産物などの物資が往来した。上矢作町内をほぼ東西に通り抜け明智、柿野と続き信濃・美濃・尾張を一本の線で結び付けていた。この街道は江戸中期ごろからにぎわったが、五街道のように人々が多様に往来した公道とは異にし、いわば馬の背による生活物資の輸送専用の道路であった。漆原地区の大馬渡（おおばど）峠（とうげ）に向かう坂道は、中馬馬子唄（ちゅうままごうた）に登場するほどの急坂で街道屈指の難所であった。今も道端にこけむした馬の水飲み鉢が水をたたえ、馬頭観音が静かに佇（たたずみ）み往時がしのばれる。

大馬渡峠の石仏群

ひとくちメモ

上矢作町本郷地区の街並みでは、かつての商家や造り酒屋、旅人宿であった格子造りの家々や土蔵が見られ、今も随所に往時の街道の姿を垣間見ることができる。

関連項目